

聖書から考える承継

～本当に受け継ぐべきこと～



執筆者

倉嶋 新

慶應義塾大 1995年卒

日本バプテスト教会連合 真砂バプテスト教会牧師

日本バプテスト教会連合理事長

KGK 理事長

「KGKスピリットの承継」が卒業生の会のテーマとして掲げられていま
す。このテーマを見た瞬間に「承継？
継承？」という疑問が頭をよぎりま

した。普段は何気なく「信仰継承」という言葉を使っていたからなのでしょ
う。というところで、「継承」なのか「承
継」なのか、そこから考えてみたいと
思います。それも「KGKらしい」よ
うな気がします。結論から言えば、「継
承」と「承継」、意味として大きな違
いはありません。一般的には、継承は、
先代が「所有していたもの」をそのま
ま引き継ぐという意味合いが強く、
「承継」は、精神的で「形のないもの」
を引き継ぐという意味のことばとさ
れています。「スピリット」という
言葉が無形のことを意味しているとい
うことで、「承継」という言葉を使わ
れたのでしょうか。しかし、私自身が
これまでよく耳にしてきたのは「継承」
です。信仰、またKGKスピリットと
は、「承継」なのでしょうか、「継承」
なのでしょうか。

聖書の教える信仰は、ただその精神
を受け継ぐだけではないようです。な
ぜなら福音は決して無形なものではな
いからです。その中心にはキリストの
十字架があり、その贖いゆえに私たち

は御国を受け継ぐ者とされました。それは
「相続地」として語られ、すでに到来しつ
つあることが語られています。いまだ完
成には至らず、その手前に私たちは位置し
ています。福音を受け入れ、この信仰を持
つことは、主イエスと共同相続人とされる
ことでもあります（ローマ8：14～17）。
この地にやがて到来する神の国の完成を待
ち望み、神の前に誠実にこの地で生きるこ
とは、相続人としてふさわしいあり方で
しょう。主人の帰りを待つ財産を託された
しもへの姿がそこに重なります（マタイ
25：14～30）。

KGKスピリットの基盤にあるのは、ま
ぎれもなく「福音」です。そこから私たち
がずれていくならば、それはたとえKGK
的に見えたとしても、もう一度考え直さ
れ、修正されなければなりません。

KGKの80年近くに及ぶ歴史の中で、みこ
とばが学生宣教を通して分かち合われ、結
実してきました。そこには具的な方法や
可視化できるものも多くあります。それは、
聖書研究や学内での祈り、夏期学校等の
キャンプです。それだけに留まらず、
OCCビルの事務所や土地もそう

しょう。そして、何よりも「人」です。卒業生の代表として私たちが送り出している主事たち、この紙面を読む卒業生、そしてすでに主の御許へと召された先輩方。そこに脈々と流れているのは、まさに人格的な交わりを通して受け継がれてきた「遣わされた地で福音に生きる」というスピリットです。

当然、聖書にもそのような人々の姿を確認することができます。出エジプトの救いは、その時だけの出来事としてではなく、荒野を旅するイスラエルの民の経験や主のみ教え（律法）を通して承継されてきました。またイスラエルから真の神への信仰や、それに伴う在り方、生き方が失われるときに、彼らは苦難を通されます。その中で、預言者たちが神のことばを語り、彼らは信仰のいのちを取り戻しました。さらに今は、主イエスによって、新たな段階へと移されています。福音は全世界に宣へ伝えられ、世界のあらゆるところに浸透していくのです。福音に生きる人によって形づくられるキリス

ト教世界観や結ばれた実は、新たな段階に移されたことの表れでもあるでしょう。

主イエスは、そのことばや行いを通して、何よりも弟子たちとの人格的な交わりを通して信仰を承継しました。律法の完成者として、また神の国の相続人としての在り方を示されたとも言えます。そして私たちもまた、神の国の共同相続人とされ、遣わされた地で主イエスに従う信仰の承継者とされています。そのような私たちがK G K スピリットや信仰を受け継ぐという時に、ただ以前のことを踏襲するのではなく、奥底にある本質的なものを受け継ぐことが大切であるのは言うまでもありません。その本質を問う姿勢もまたK G K らしきではないでしょうか。

教会で大切に受け継いできたものの一つが「聖餐」です（マルコ14:22〜25、エペソ5:20〜26）。私たちは主の聖餐を通して、繰り返し繰り返し、十字架の恵みを覚えます。それはただ儀式として繰り返しているのではなく、聖餐を通して、私たちは毎回

心新たに信仰を告白し、十字架の恵みと与えられた主イエスのいのちを覚えつつ、主の食卓に参与しているのです。忘れてはならないのは、ここに「聖霊」の働きがあるということでしょう。人の力や功績ではなく、聖霊の働きがあるからこそ、この信仰は本質を失わずに脈々と受け継がれてきたのです。

私たちが、K G K の卒業生として大切にしないでならないことは、「K G K スピリット」ということばだけを次世代にただ引き継がせて、存続させることではありません。まず私たちが遣わされた地で福音に生きる。罪赦され、神と和解し、神の子とされ、キリストにある望み与えられたものとして生きることを通して、K G K スピリットが、そして福音の本質は表されることでしょう。私たちが問うべきは、単なる物事の継承ではなく、福音の本質の承継なのです。この文章を書きながら、遣わされた地で福音に生きる卒業生が、日本の、いえ世界の各地にいて、今も奮闘しているということを感じて、心熱くされています。これからも一緒に、この信仰に生きてまいりますように。

卒業生会

お知らせと報告

卒業生会役員リレー連載

シリーズ
K G K
スピリット
の
承継



22年国際基督教大卒
高橋 基喜

火の中を歩いて

大学卒業を控えた昨年(2021年)の3月。僕は職場に出ていくのを楽しみにしていました。仕事の内容が楽しみだっただけというより、職場で神様に仕えるぞ!という意気込んでいたのです。生活スタイルが変われば、教会生活を含めさまざまなことが変わってきます。けれども、どんなことがあっても、誰のために生きるのかは学生時代と同じであると信じていたからです。

そんな僕は職場に配属されてから、自分の無能さを痛感しました。「周りはみんなできていなのに、なぜ僕だけできないのか」と自分自身に呆れ、上司には数え切れないほど怒られ、仕事上での相手には怒鳴られました。悔しくて職場で泣いてしまったこともありまし

た。気づいたら、職場のために祈ることもやめていて、神様に仕えるという使命から仕事のモチベーションを得ることもなくなっていました。働き始めた頃



に感じていた、天の国民としての主体性は薄れていました。職場の人の陰口で同僚と盛り上がりつつも、なんとも感じなくなっていました。

それでも、日々のデボーション(静思のとき)や主日礼拝で神様との時間を過ごすなかで、自分がどれだけ神様から離れやすい者であるか、僕にとつて福音がどれだけ必要かについて教えられました。そして、こんな僕に対して神様は「あなたを愛している」、「あなたを遣わそう」と、学生時代と同じように語りつづけてくださいました。

そんな僕は職場に配属されてから、自分の無能さを痛感しました。「周りはみんなできていなのに、なぜ僕だけできないのか」と自分自身に呆れ、上司には数え切れないほど怒られ、仕事上での相手には怒鳴られました。悔しくて職場で泣いてしまったこともありまし

た。気づいたら、職場のために祈ることもやめていて、神様に仕えるという使命から仕事のモチベーションを得ることもなくなっていました。働き始めた頃

新卒者歓迎会に参加して



23年聖学院大卒
澤 まりや

5月8日にK G K学生ホールにて、新卒者歓迎会が開かれました。23卒までの卒業生と主事連で合計54名が集まり、塚本良樹主事を通して御言葉が語られました。

私は4月から、ミッション系の小学校で補助教員として働き始めました。1年生の補助として、児童全体の様子を観察しつつ、困っている児童の補助に入り、必要に応じて児童への声掛けをします。「補助」と言っても、担任とは違う立場や視点をもって児童と関わることは想像以上に難しく、反省する毎日です。心も体もついていくので必死でした。また、担任を持ちたいという思いを持っていた私は、思い描いていた仕事とのギャップを感じ、葛藤する毎日でした。しかし、今年3月に参加した春期学校(K G K主催の春キャンプ)で語られたように、どんな荒波の中でもイエス様にしがみつづけられるように、毎朝聖書を読み、祈り、感謝して一日を始めることを大切にしようとして生活していました。

そのような中で、新卒者歓迎会があり、久しぶりにK G Kの交わりに参加しました。懐かしい先輩、同期、主事の顔を見て、とてもほっとしました。神様はヨハネ2章1節、11節を通して語られました。給仕の者たちは、大変で面倒な命令に従い、地道に水を汲み続けました。そして、その水は豊かなぶどう酒へと変えられました。同じように私たちも、一見よく分からないような命令でも、誠実に仕事に向き合うこと、遣わされた地で誠実に生き続けることを教えられました。給仕の者たちの働きが用いられたように、主は私たちの働きも用い、すべて益としてくださることに気づかされました。

以前は、何のために仕事をしているのだろうという思いが強かったけれど、この仕事も益とされると信じ、平安な気持ちで、喜んで仕事をすることもできるようになりました。まだ全てがそう思えるわけではなく、葛藤はありますが、祈りつつ歩んでいます。

私は、一人では生涯を通して福音に生き続けることはできないけれど、教会、K G Kの、生涯続く、信仰の土台としての交わりがあります。今までも、これから先の歩みもすべて、御手の中であり、主が用いて下さることを、みことばによって、交わりによって、教えられていきたいです。





劳い合い、 使命を確認する交わり

7月15～17日の日程で、年に一度のKGK全国卒業生会代表者会議がもたれました。今回の開催地は大阪で、東京開催と比べると費用はかかりましたが、関西地区卒業生会（シグマ会）の役員と主事が日帰りで参加して下さり、「励ましを受けた」という感謝の報告を聞くことができました。今後、各地区で順番に開催していく予定です。

全国各地から集められた代表者たちは、それぞれの働きの多忙さ、試練や誘惑があるなかで、他の卒業生たちのために、そして現役の学生たちのために祈りつつ、精一杯仕えてくださっています。それでも、教会から、交わりから、信仰から離れてしまう卒業生たちがいるという現実があります。イベントを開催しても人が集まらず、無力感と徒労感を覚えることがあります。

だからこそ、代表者会議においては、直接顔を合わせ、寝食をともにしてじっくりと交わりをもちながら、互いを労い合うことを大切にしています。その交わりのなかで、自分たちに託された使命としてのKGKスピリットを再確認します。使命というものは、何度も確認されなければ、忘れてしまったり、有名無実化したりするものだからです。

そのような交わりから、代表者たちは全国各地に遣わされていきました。どのような困難があろうとも、知恵を求め、力を求め、誠実に仕え続けるために、他の卒業生たちを、そして学生たちを支えるために。そんな卒業生たちとともに、全生涯を貫くKGK運動に仕えることができることに心からの喜びを覚えています。

新井 慶子

○ 最近、相手に言えてなかった一言は？
愛結実ちゃんと一緒に自分達ならではの素敵なクリスマスチャンホームを築いて下さい！

○ 相手を聖書の人物に例えること？
食べることを大切にしていた、という点でイエス様。
幼稚園から高校生の頃まで毎朝家を出る時「行ってきます！今日の夕ご飯は何？」と必ず聞いていた。ほとんどの好き嫌い無く食べることに楽しく食べることを大切にしていたなあ。家族だけでなく度々友達が家に来て一緒に食事したり、時には外食も。食育の大切さを息子から学びました。

○ 相手と過ごした大切な「時間」は？
就職して家を出るまで親子として共に過ごした時間の全て。

○ 相手がいることで「助かってるなあ」と思うことは？
それぞれ遠く離れていても「この事を祈ってほしい！」と言えること。
○ 子供に受け継いだ大切なこと
神様を愛すること。



新井 悠之

○ 最近、相手に言えてなかった一言は？
我が家はみんな離れて暮らしているけれど、新井家のみんなの信仰は母さんの祈りによって支えられています！いつもありがとう！

○ 相手を聖書の人物に例えること？
人生の予想外のことも主を信じ心に留める点でマリアさん。

○ 相手と過ごした大切な「時間」は？
受験や就職などの、人生の選択をする際に一緒に祈った時間。

○ 親から受け継がれた大切なこと
神様を信じて、忍耐深く祈り続けること。

○ 相手がいることで「助かってるなあ」と思うことは？
いつも祈ってくれているという安心感があること。

母 新井 慶子
跡見学園女子大 86 年卒

教会 日本福音自由教会協議会
春日部福音自由教会

仕事 放課後児童クラブ
支援員

家族 夫 & 猫
(♀推定 10 歳)

趣味 子供と遊ぶ、茶道、
建物探訪

好きな食べ物
飲茶、フオー、チゲ鍋

息子 新井 悠之
上智大 18 年卒

教会 日本福音自由教会協議会
名古屋福音自由教会

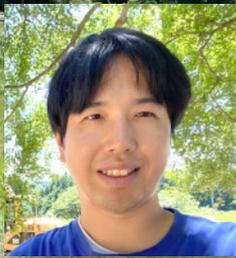
仕事 会社員
(食品メーカー勤務)

家族 妻

趣味 食ブログ上位店巡り、
リアル脱出ゲーム、
野球観戦

好きな食べ物
納豆(金のつぶとろっ豆)、
味噌

末松謙一



K.Suematsu

日本大学法学部 2015 年卒
障害者就労継続支援 B 型事業所 むすび大曽根
サービス管理責任者

Professional

福祉施設職員

Theology of Work

仕事の神学

わたしは神から何を任されているのか
神の世界において何のプロフェッショナルとして召されているのか
キリスト教の視点でわたしたちの仕事を「神学」するリレー連載

末松謙一にとって「福祉施設職員」とは — インマヌエルなる神と共に、一人の人の存在を喜ぶ仕事

誰しも生きていれば、「生きづらさ」というものを感じることもある。私自身も学生時代にうつになった経験から、自分の内にある不安定さや繊細さを自覚するようになったことで、社会で生きる中での生きづらさを感じるようになった。「弱さ」や「痛み」は、生きづらさに直結することを知った。

障がい者福祉の現場で働く中で百人を超える方たちと関わる機会が与えられてきた。たくさんの言葉を聴く中で、その奥にある言葉にならない深いうめきが伝わってくることも幾度となくあった。過去の経験に縛られてどうにもならない不安。現状への渇き、人への恐れや怒りが心の内で暴れ出し、この感情を自分では全くコントロールできない時の失望と孤独。日々働いていると、人として生きる根本的な課題や困難、弱さも痛みも、誰だってそうは変わらないということに気付かされる。人はみな、弱く、痛み、うめく存在であり、それぞれに抱えている「生きづらさ」がある。

イエス様は、命をかけてインマヌエルという生き方をされた。弱さを覚え、生きづらさを抱える方たちと共に生きる歩みをされた。弟子たち、サマリアの女性や長血の女性など、自ら一人一人の存在と出会いに行かれ、話を聴き、癒され、交わりへと招かれた。弱さや痛みは神と出会う場所となり、抱え続けて来た「生きづらさ」は、神の愛の中で生かされる喜びと平安を強く感じさせるものとなったのである。

私が働く施設では、障がいを持つ方々と一緒に農作業や養鶏に取り組んだり、自社製品としてビールやハーブティーを作ったり、山を開拓してキャンプ場を作ったり、ユニークな時間を過ごしている。彼らは楽しく過ごせる時もあれば、感情があちこちに激しく動き回ってしまう時もある。私の仕事は、現場で彼らと一緒に働きながら、彼らのニーズを聞き取り、支援計画を立て実行し修正を繰り返すことであると同時に、どんな彼らとも共にい続けることで

ある。トラブルは日々絶えないが、弱さがあるから繋がり、生きづらさを知るからこそ共に生きる喜びを知ることのできる。仕事を重ねれば重ねるほど、自分には何もできないことを知るのみである。

「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」(使徒の働き 3:6)

私自身も生きづらさを覚える者として、イエス様が歩まれた道を、出会う一人一人の存在と共に歩いていく。福祉は、共生社会を実践する場であり、今日もそこに神が働かれている。



『信じてても苦しい人へ — 神から始まる「新しい自分」』

中村 稔 著、いのちのことば社、2021年

本著は、中村稔先生が月刊「いのちのことば」で連載していた内容を好評につき、単行本化したものである。まさにタイトルにある通り「信じてても苦しい人」に向けられた本だ。
神を信じていたとしても信仰生活がうまくいかないことがある。神を信じたのになかなか変わることができない自分に悩むこともあるだろう。かく言う私も、教職者でありながら「どうして自分は変わることができないのか」「もっと頑張らなければ」と思うことが多々ある。
本著はそんな現実、「私」本位から「神」本位への転換を促してくれる。私たちは、神を一番にすと言いつつ、気づかぬ間に私が一番になってしまっていることがある。「私」は変わることができない。「私」が頑張らなければ、しかし本著を読むと、信仰生活のすべてが「私」本位から「神」本位に変えられる体験をする。「自分で頑張らなきゃいけない信仰」ではなく、「神によって変えられる信仰」に気づかせてくれる。
「クリスチャンになったはずなのにどうして…」と悩んでいる人にオススメしたい。ギョッと縮こまり、凝り固まってしまった信仰をほぐしてくるような一冊である。

紹介者

法政大18年卒
日本同盟基督教団
招待キリスト教会 伝道師
金田優輝

信じてても苦しい人
— 神から始まる「新しい自分」
中村 稔



ブックレビュー

学生世界のリアル

主事の働きを通して知る、今のK GK。
主事の視点から見る、学生宣教の最前線。

関東地区主事

石山麻美

担当
教会

神奈川BAYブロック
茅ヶ崎シオン・キリスト教会



「伝道をしたい」「友人を教会やK GKに誘いたい」そのような声を、学生からよく聞くようになった。自分に伝道ができるのだろうかという不安はある。誘ったあとに断られて気まずくなったら嫌だという恐れもある。それでも伝道したいと願う学生たちがいる。そこには、神様と生きる喜びを知り、遣わされた学校にも神様の支配と計画があるのだと受け取ってきた学生たちの姿が見られる。

遣わされた地で伝道する

オンライン活動が中心になった期間は、K GKに参加する未信者学生が減少した。友人を活動に誘うことは難しかった。誘っても、オンラインでは相手の様子や心情がわかりにくく、フォローすることに限界も感じた。そのようななかで「K GKは内向きがちになっている」と、自分たちも思っていた。

しかし、昨年度の終わり頃から伝道の思いが関東地区全体で高まっている。K GK学生同士の深まってきた交わりが、広がりをもってきているように感じる。「内向きがち」に見えていた中であって、K GK学生がお互いへの信頼を増し、未信者の友人を誘おうと思える土壌ができてきたのかもしれない。

何より、神のことばに心を燃やされている。2月のNET(主事会が準備している全国訓練会)では「神様をきちんと知り、正しく愛し、深く確信して、愛する人に伝える」ことを目的として、聖書の全体像を学んだ。3月の春期学校では、派遣意識をテーマに伝道について語られた。分かち合いの時間には「自分が神様と生きる喜びを本当に知ったとき、この喜びを大切な人に伝えたいと思うようになった」と学生が話していた。中には伝道に苦手意識がある人も、重荷がないと感じている人もいる。しかし、福音

を理解し、福音に生き、喜び、変えられていくとき、福音を伝えたい思いがあふれ出てくるのだと、学生の姿から教えられた。

春の合宿シーズンを終えてそれぞれのキャンパスに遣わされ、前期は多くの学内で聖書を開いて祈る交わりが再開した。悩み、葛藤しながら、ここにも神の支配と計画があるのだと知り、これも神様と一緒に生きる場所なのだとして受け取っていく姿がある。そして、この学校にいる大切な友人にも神様は働いてくださるのだと期待する心が生まれている。学内活動が内輪の交わりでとどまるのではなく、むしろ深みや広がりを増し、伝道の場としてますます用いられていくことを願っている。





ブロック活動の **今** 関東

伊勢崎線ブロック

過去

Past

Present

未来

Future

今回このようにしてブロック活動について分かち合う機会をいただき感謝します。私が属している伊勢崎線ブロックは、おおよそ10名前後で、草加市にある草加福音自由教会にて毎月ブロック祈禱会を開いています。ブロック活動について過去から未来まで幅広く捉えて、できる限りわかりやすくお伝えできればと思います。

伊勢崎線ブロックの特徴は、なんといっても圧倒的にアットホームであるということです。入学当初、さまざまなブロック祈禱会に顔を出し、「知り合いが少ないし、どうやって話しかけよう」と不安に思っていた時、優しい先輩のおかげで楽しく、1年生の自分でも盛り上がることでできとても良かったのを覚えています。しかし、人数が多いブロックでは全員をカバーするのが難しい現状があり、輪に入ることのできない人が一定数いる事は仕方ないことなのかなとも思ってしまう。そんな中、伊勢崎線ブロックの良いところは、人数が少ない分「一人一人が主役になること」が可能だということです。伊勢崎線はアットホームで、たとえ新入生であっても奉仕を担い神様を見上げる環境が与えられています。そして、現に「一人



一人が心から楽しみ、全員で同じ神様を讃える」事ができていて、本当に感謝しています。このような環境があったからこそ、去年今年と多くの1年生が今も来続けてくれています。伊勢崎線は人数が少ない時は「参加者が全員奉仕者」みたいな時もありますが、このような環境でも神様が集まる場所と時間を与えてくださっていることに心から感謝したいです。

これからの伊勢崎線ブロックのために祈っていたきたいことは2つあります。1つ目は、「これからも一人一人が神様に導かれてともに集い、一人一人が神の子として輝けるように」。2つ目は、「ブロック祈禱会に来てくれるノンクリスチャンが、いつか神様を信じ洗礼を受ける事ができるように」です。

伊勢崎線ブロックは、他のブロックに比べ人数も少なく大変な時もありますが、伊勢崎線ブロックだから持っているモノを大いに用いて、これからも素晴らしい活動を作り上げていって欲しいなと思います。圧倒的にアットホームな伊勢崎線ブロック、僕は大好きです。

獨協大学4年 土屋颯生 



キリスト者学生会 関東地区卒業生会誌

コイノニア 2023年9月 213号

編集委員：阿部聖香、稲垣新、岩瀬ふらの、河野言葉、桑島大志、小谷枝薫、道法涼子、西村信幸、林直也、吉田明理、塚本良樹（主事）
発行：キリスト者学生会関東地区卒業生会
東京都千代田区駿河台 2-1 OCCビル 402 号室
TEL/FAX：03-3294-6916/6050 郵便振替：00170-1-83649
発行部数：1600部 / 年4回

【編集後記】
「コイノニア」は、幅広い年代の、様々な地に遣わされている方が執筆に携わってくださっています。神様から受けた思いや考え、経験も十人十色。そこにもここにも神様が働いてくださっているんだと感じます。
私は本号から編集委員に加わりましたが、執筆者と直接関わり、こうして皆さんに読んでいただくことを通して交わることを嬉しく思います。
これからも「コイノニア」を通して、神様の恵みを届けたい、そして私自身もたくさん受け取っていききたいなと思います。（岩瀬）